山口県立大学
Yamaguchi Prefectural University

第37号
令和3年5月25日

山口県立大学
郷土文学資料センターだより

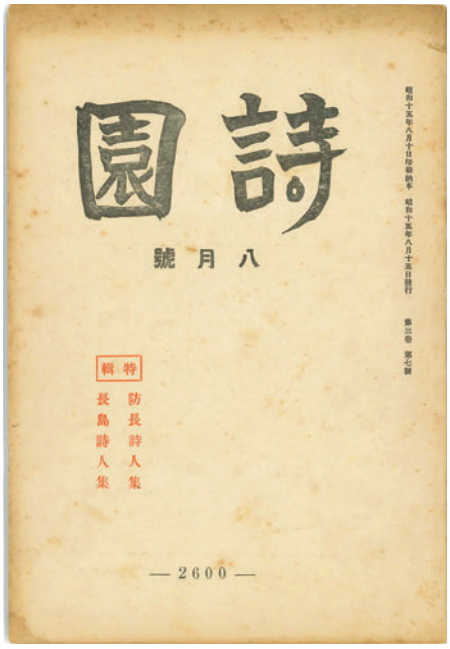
「詩園」につどった人々

中　原　　豊（中原中也記念館・館長）

既存の「詩園」全27冊に寄稿者として名が記されているのはのべ303名にのぼる。一部は重なるかもしれないが、「哀愁生」「K生」などの筆名が5種見られる他、無記名の記事も18ある。地方で発行されていた同人誌としては、決して少なくない数である。

第２巻第１号に掲載された年賀の記事には、同人12名、編輯部２名、営業部２名、会計部１名の氏名が挙げられており、まずはこの17名が当時の主要なメンバーであったと考えられる。

編輯人として名前が挙がっているのは、矢嶋行隆、長谷執持、林かほるの３名（最終の第５巻第８号のみ村田公亮）だが、編輯後記の執筆者としては、阿川芳雄、和田健、村田富久太、古沼耿二の名前が見え、特に矢嶋が編輯人であった第２巻第５号までは実質的に共同編輯のかたちを取っていたように見受けられる。



「詩園」第３巻第７号表紙

こうしたメンバーの発表作品の中心をなすのは詩である。最も多くの作品を寄稿し、第３巻第２号では単独の特集が組まれた他、同時期に私家版の詩集『生活の貌』を刊行している和田健、「詩園」と同じ出版社（金園堂書房、林文泉堂、山口県出版株式会社）からそれぞれ個人詩集を刊行した中原呉郎（『煙の歌』）、長谷執持（『梨の花』）、永井正春（『三十歳』）、林かほる（『母の歌』）、村田富久太（『戦野にうたふ』『朝の歌』）らが注目される。同時に、小説、随筆、評論など散文も多数掲載されており、寄稿者としては先に挙げた和田、長谷、永井、木谷三千男らの他、後に小泉喜代一、宗野眞幌らが加わって誌面を賑わわせている。

その次に位置するのが、例えば第２巻第１号の目次で「誌友」と呼ばれているような寄稿者である。「詩園」を彩った短歌、俳句、川柳、歌謡などのジャンルの作品のほとんどは、こうした寄稿者によるものであり、そこに総合的な詩歌誌を目指そうとした姿勢がうかがえる。そこには、歌人の友廣保一、橋本武子、俳人の種田山頭火、兼崎地橙孫など、それぞれ山口県内の別の場で実績を積んでいた書き手も含まれていた。また、中原中也の生前未発表作品の紹介を続けたことも「詩園」の特徴の一つであるが、「私の愛誦詩雑記」という連載企画で萩原朔太郎らの詩を紹介し、吉田常夏の追悼特集を組むなど、先人の業績を掘り起こし引き継ごうとする意志を示していた点も見逃せない。

また、寄稿者の７割以上が１回限りの寄稿であり、しかも「山口県総合誌」と称する最終第５巻第８号でその数が143名に上ることも注目に値する。それは木谷三千男「防長文学の烽火」（第３巻第３号）などに端を発し、第４巻以降の発行所の名称が「防長文学会」と変わることが如実に示している、詩歌誌から地方文芸誌への流れの延長上にある。学生やハンセン病療養所・長島愛生園の入所者を含む多くの書き手に発表の場を与えたことは事実だが、時代が戦時色を一層濃くする中、文学者の組織化を進める時流に沿ったものであったことも否めないだろう。こうした流れが後継誌「防長文学」へと続いていくことになるのである。

文芸同人雑誌『詩園』について

加　藤　禎　行（郷土文学資料センター・研究員）

1938〈昭和13〉年九月一〇日、山口市で文芸同人雑誌『詩園』が創刊された。『詩園』は、中原思郎・中原呉郎らの尽力で中原中也「夏と悲運」他の中也遺稿が初出掲載された山口市発行の文芸同人雑誌で、種田山頭火と同時代の山口市の詩人との交流を示す雑誌でもある。1938〈昭和13〉年九月二四日『防長新聞』四面掲載の「新刊紹介」欄には「▲詩園（第一巻第一号）『詩話』が発展して『詩園』となつた、山口に於ける郷土詩人の啓発団結を図り又邇く現詩界の新人に呼びかけ相互の進展に寄するといふのが本誌の目標である編輯責任者は長谷執持氏である（二十銭山口市金圃堂書房）」とある。

記事が述べる『詩話』は、山口詩話会が発行した詩誌『詩話』（未見）。編輯責任者とされる長谷執持は『詞華集／山口県詩選』（1938〈昭和13〉年七月一五日、白銀日新堂書店）を福富武人と共編した人物である。同書巻末「詩人略歴」掲載の長谷執持の履歴には「昭和十二年初頭山本秀一、林かほる等と共に山口詩話会を結成し山口詩文化向上のため、詩の朗読会を催しゝこともあり。」とある。

実際の創刊号奥付に掲げられた編輯者兼発行は金圃堂書店の矢嶋行隆（1939〈昭和14〉年六月一日発行の第二巻第五号まで）。1939〈昭和14〉年八月一〇日発行の第二巻第六号から1940〈昭和15〉年三月一日発行の第三巻第三号までは、奥付に編輯人として長谷執持の名が、1940〈昭和15〉年五月一日発行の第三巻第四号からは、編輯兼発行人として林かほるの名が掲げられた（1942〈昭和17〉年三月五日発行の第五巻第二号まで）。

『詩園』は、1938〈昭和13〉年九月発行の第一巻第一号から1943〈昭和18〉年八月発行の第五巻第八号まで、おそらく二七冊が刊行されている。『詩園』発行の特集号は以下の通り。第二巻第二号「吉田常夏追悼号」（1939〈昭和14〉年一月二五日発行）、第三巻第一号「詩園詩華特輯号」（1940〈昭和15〉年一月一日発行）、第三巻第二号「和田健詩集号」（1940〈昭和15〉年二月一日発行）、第三巻第七号「防長詩人集　長島詩人集」（1940〈昭和15〉年八月一五日発行）、第五巻第八号「特輯＝寺内元帥を讃ふ」（1943〈昭和18〉年八月五日発行）。

1942〈昭和17〉年三月五日発行の第五巻第二号から、一年五ヶ月を経て、1943〈昭和18〉年八月五日発行の第五巻第八号が発行される。編輯兼印刷兼発行人は山口県出版株式会社社長の村田公亮。この間、五号分の号数が飛躍した経緯は未詳。新しい編輯体制が八月発行を機械的に八号としたか。あるいは、紙資源払底のなか同人間で簡易なリーフレット等が継続的に出版されていたか。第五巻第八号「編輯後記」は、「思つたより長い休刊であつたがこれには深い訳があるその『訳』については此の際触れるを避けて置いた方がよいと思ふ。ただ戦時下において健全な地方文化が一層必要なことは申すまでもなく、われわれは此の線に副つて、より高度に研讃の歩を進めて行きたい」と述べる。戦意昂揚が求められ、また紙資源が稀少となる戦時下で、ゆったりとした活字組版の詩雑誌の刊行が直面した困難は想像に難くない。

1943〈昭和18〉年八月一二日『関門日報』二面に掲載された『詩園』最終号の出版広告には、「山口県文芸総合雑誌／詩園／定価五十銭郵税四銭／８月号　県下の有力書店及び購買店で発売中、即刻掴まれよ／発行所　山口市銭湯小路二　下関市東南部町三三／山口県出版株式会社　振替下関一六四三番」とある。この号を最後に、『詩園』は『防長文学』（1943〈昭和18〉年十月五日発行、九月号十月号）へと改題された。

雑誌「詩園」と中原中也

原　　明　子（中原中也記念館・学芸担当職員）

今でこそ山口を代表する詩人として知られる中原中也だが、その名が全国的に知られるようになったのは主に戦後であり、生前、郷里・山口の人々が中也に向けたまなざしは厳しく、決して温かいものとはいえなかった。故郷を離れ、生家の仕送りに頼りながら東京で詩人の道を歩む姿は、立身出世を尊ぶ当時の人々にとって、受け入れがたいものだったのだろう。

しかし、中也が没した約１年後の昭和13年には、早くも山口の文学青年たちによって中也の顕彰活動が始まっていた。その場となったのが、昭和13年９月に創刊された同人雑誌「詩園」だった。同人は和田健、長谷執持、矢嶋行隆、林かほる等の他、中也の弟・中原思郎や中原呉郎も参加していた。創刊号（昭和13年９月10日刊）の「編集後記」では「中原中也氏の原稿は何といつても『詩園』の誇り、中也研究は私達山口詩人の課題だ」（長谷執持）と記され、中也にあこがれ、あやかろうとする若者たちの熱い意気込みが感じられる。

同人らは、中也を目指して詩の創作に励みながら、中也の一周忌に墓参を行ったり、誌上に中也の遺稿を掲載したりするなど、積極的に顕彰活動を行った。「詩園」は昭和17年に終刊となるまで27冊が発行されたといわれているが、そのうち中也の作品は詩（「夏と悲運」「漂々と口笛吹いて」）や翻訳（「谷間の睡眠者」）等のほか、日記の引用など全16篇が紹介されている。また創刊号には、中也の「詩的履歴書」の原稿を元に「中原中也研究ノート」（和田健・中原呉郎共編）と題して、最初の中原中也年譜が掲載された。

なかでも最も尽力したのが、「詩園」の同人で、中也の弟でもある中原呉郎であった。文学を愛好し、詩の創作も行っていた呉郎は、東京にいる小林秀雄の元を訪ね、中也の原稿類を山口に持ち帰り、それを遺稿として「詩園」に載せた。また、当時山口県内に住んでいた俳人・種田山頭火と親密な交友を結び、同人たちとの橋渡しをしたのも呉郎だといわれる。こうした形で親族が「詩園」に関わり、全面的に支援していたのも、早い段階で中也の顕彰活動が可能になった大きな理由の一つであろう。まさに地元・山口ならではのメリットが存分に生かされたといえる。昭和22年、作家の大岡昇平が中原中也論を書くため中原家を取材したときに、遺族が対応することができたのも、こういった下地があったからかもしれない。

昭和13年に国家総動員法が施行され、急速に戦争へと傾いていく時代にあって、中也の生地・山口で、中也を敬愛し、中也を目指して文学活動に励んでいた若者たちがいた。彼等にとって中也の存在は精神的な支柱であり、中也は陰ながら戦時下の山口の文学を育んでいたともいえよう。

中原中也記念館では、令和３年９月29日より企画展Ⅱ「雑誌『詩園』――中也・山頭火と山口の文学青年たち」を開催する。展示を通して、戦時下の山口の文学を支え、中原中也顕彰の先駆けともなった「詩園」の活動を詳しく掘り下げていければと思う。

中原中也一周忌墓参記念写真

『詩園』同人と種田山頭火

髙　張　優　子（山頭火ふるさと館・学芸員）

昭和13年11月、種田山頭火は小郡町（現・山口市）の「其中庵」から湯田前町の「風来居」に移り住んだ。翌年９月に四国へ渡るまでの約1年間の風来居時代は、若い文学青年たちと交流があった、と説明されることが多い。

その若い文学青年たちの多くは、文芸雑誌『詩園』の同人であった。この時期の日記を読むと、彼等との交流の一端が見える。その筆頭として、中原中也の弟であり、其中庵時代から交流のあった中原呉郎と、後年山頭火の顕彰にも努めた和田健がいる。日記にはその二人を中心に、『詩園』創刊号から第2巻第5号まで編集・発行人を勤めた矢嶋行隆、『詩華集山口県詩選』（白銀日新堂書店、昭和13年）編集人でもある長谷執持と福富武人、村田富久太などが登場する。またＨとして登場するのはおそらく林かほるであろう。彼らとは年の差を感じさせないほど非常に親しく飲み語らっていた様子が綴られている。

午後、和田君に誘はれて、宮野の阿川君を訪ねる、（中略）客としては和田君、藤井君、村田君、そして私、よく食べよく飲んだ、暮れるころから、同道して山口へ、矢島さんのところでまた御馳走になり、中原君兄弟もいつしよに繰り出してＳ軒で騒いだ。[1]

一方で『詩園』誌面を見ると、山頭火自身が寄稿しているのは昭和14年2月の「吉田常夏追悼号」のみだが、「賛助」の筆頭として山頭火が据えられている点が目を引く。また、折々に消息が掲載され、扉に句が引用されることもあった。以下、扉に掲載されたものを列挙する。

①勝たねばならない／大地いつせいに芽ぶこうとする　（昭和14年3月号）
②天われを殺さずして詩を作らしむ／われ生きて詩を作らむ／
　われみずからのまことなる詩を　（昭和15年7月号）
③雷をまじかに覚めて／かしこまる　（昭和15年8月号）
④遍路行／ふたたびはわたらない橋の／ながいながい風　（昭和16年11月号）
⑤勝たねばならぬ大地／一せいに芽ぶかうとする　（昭和17年3月号）

これらの出典を確認しておくと、①②⑤は第六句集『孤寒』（昭和14年1月）所収。③は一代句集『草木塔』（昭和15年4月）所収。④は現在、句帖で昭和14年10月31日付けと確認できる。

①から③については、新しい句集を手に入れた『詩園』同人たちが、特に感銘を受けた句や一節を取り上げたのだろう。一方山頭火没後の④や⑤は明確な意図のある引用だと考えられる。④は橋の写真とともに載せられ、装丁の一部として機能している。⑤の句は二度目の引用であるが、より戦争の色が濃くなっている時期であり、山頭火の意図以上の意味合いが付加されていると考えられる。

「風来居時代」の山頭火は既に自由律俳句の世界では名を知らないものはなく、それでも日々句作の道を追い求めていた。中原呉郎は「あの貧乏で、定職なしで、しかも自由に、旅をし、句を作り、ある意味で最も贅沢な暮らしをした人であった。」[2]と回想する。そのような姿を間近で見ていた若い詩人たちが、親しい交流を持ちながらも、山頭火とその作品に対して敬意と憧れを持っていたであろうことは、『詩園』誌面での山頭火の取り上げられ方からも伺い知ることができる。

---

[1] 「其中日記」昭和十四年一月三日（引用は『山頭火全集　第九巻』（春陽堂書店、昭和62年）より）
[2] 中原呉郎『海の旅路　中也・山頭火のこと他』（昭和出版、昭和51年）

地方文化の発信としての地方文芸誌内容細目作成

井　関　和　彦（山口県立図書館・司書）

やまぐち文学回廊構想推進協議会が選定した、総勢100名の「やまぐちの文学者」たち[1]、その中のある文学者に興味を持ったとしたら、当然その作品を読んでみたい、と思うでしょう。たいていの作品は、まず、雑誌（いわゆる地方文芸誌）に発表されることがほとんどです。では、雑誌に掲載された作品を読みたいと思ったとき、図書館でうまく探すことができるでしょうか。

残念ながら、難しいのです。図書館の蔵書検索のベースとなる目録は、一冊一冊の図書や雑誌を探すことに特化しています。本や雑誌の中身、例えば、ある雑誌のある号に載っている記事や作品を探すことは、基本的にできません。記事・作品のレベルで図書や雑誌を探すためには、目録とは別の「ツール」が必要になります。

雑誌の記事を探すためのツールとしてよく知られているのは、国立国会図書館が作成している「雑誌記事索引」[2]です。２万を超える様々な分野の雑誌の記事を無料で検索できる、極めて有用なツールです。ただ、残念なことに、戦前の雑誌や、創作作品を発表する雑誌などは、記事の収録対象としていません。他に、有料のデータベースとして、文芸作品も比較的広く収録した「MagazinePlus」[3] や、明治期以降の地方誌を広く収録した「ざっさくプラス」[4]などがあり、それぞれ有用ですが、それでも網羅的に探すことは困難です。地方文芸誌に掲載された作品を探すツールは、現状ない[5]、といって過言でないでしょう。

こうした状況下で、やまぐち文学回廊構想推進協議会が、調査研究事業として、地方文芸誌の内容細目を作成し公開することの意義は大きいものと考えています。この取組によって、有名無名を問わない多くの「文学者」たちが、新たな読者を得ることができるかもしれません。地域の文学・文化の情報発信の最たるものといえるでしょう。

以前、図書館がこうした地方文芸誌のデジタル化を進める必要があること[6]を述べました。私達の生活を一変させた「コロナ禍」は、奇しくも、図書館におけるデジタル資料の存在感を大きく高めています。地方文芸誌を含む、地域の資料のデジタル化がますます望まれるところですが、それにもまして、紙資料・デジタル化資料を問わず、その目次や記事をデータ化し、「見えるようにする」ことが、今、重要になっています。

最近の図書館には、人が集まる「場」としての機能を期待されていたふしがあります。それが、「コロナ禍」により一転して、「密」を避けることが何より求められるような状況に陥っています。このような中で、図書館がすべきことの一つは、地道にデータを作り、そしてそれを公（おおやけ）に利用しやすい形で出していくことだと考えます。人と本、人と人をつなぐのが図書館員の使命だと言われますが、今こそ、データを作ることで、人と本、本と人をつなぐことが求められているときではないでしょうか。

この小文は、クリエイティブ・コモンズ表示4.0ライセンス（CC-BY）で公表します。

---

1 “山口の文学者たち・ふるさとの文学者100人”. 山口県． https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a19300/literary/80.html

2 「雑誌記事索引」については、次の文献に概要がまとめられています。 田代篤史．書誌データからみた70年史（3）―雑誌記事索引．NDL書誌情報ニュースレター． 2019, 51, p.1-9. https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11423784

3 “日外アソシエーツの雑誌・論文情報 MagazinePlus 案内”. 日外アソシエーツ. https://www.nichigai.co.jp/database/mag-plus.html

4 “ざっさくプラス”. https://zassaku-plus.com/

5 山口県立大学郷土文学資料センターが所蔵雑誌の記事細目を「郷土文学関係雑誌細目」[https://www.yamaguchi-pu.ac.jp/li/hm/center/]として公表しているのは、先駆的な取組として優れていると思います。

6 井関和彦．近代郷土文芸誌の保存と利用促進．山口県立大学郷土文学資料センターだより．2020, 35, p.5, https://knowledge.lib.yamaguchi-u.ac.jp/556

寄贈図書（2020年12月～2021年4月）

佐伯清美・畑山静枝『合同詩集　ユリノキ』

寄贈雑誌（2020年12月～2021年4月）

『其桃』第913~915号（「其桃」発行所）、『すばる』第55号（すばる俳句会）、『中原中也記念館館報2021』第26号、『和海藻』第36号（豊北郷土文化友の会）、『風響樹』第53号（風響樹同人）、『颷』第116号（颷文学会）、『ふるさと通信　きずな』第12号（ふるさと紀行編集部）、『文芸山口』第355~356号（山口文芸懇話会）、『山彦』第161~163号（山彦発行所）

一の坂川の桜

編集後記

今号では、文芸同人雑誌『詩園』について、中原豊（中原中也記念館･館長）･加藤禎行（郷土文学資料センター･研究員）･原明子（中原中也記念館・学芸担当職員）・髙張優子（山頭火ふるさと館・学芸員）各氏にご寄稿いただきました。また、井関和彦氏（山口県立図書館・司書）には、『詩園』をはじめとした地方文芸誌を図書館で探すための方法とその現状をご報告いただきました。なお、これらは令和２年度受託研究「「やまぐちの文学者たち」に係る調査・研究」の成果の一部です。コロナ禍で先行きの見えないながらも、創作・読書等の文芸行為は、他の芸術に比べると、非常時でも変わらずできることが多いと実感する日々です。

（菱岡憲司）

山口県立大学
Yamaguchi Prefectural University

■編集発行：山口県立大学郷土文学資料センター（〒753-8502　山口市桜畠3-2-1）
TEL.（083）928-0211　　FAX.（083）928-2251
■発行日：2021（令和３）年５月25日